Japanese Association for Religious Studies

状況を変化させていた。

これらの動きは、一、シャリーアの法規範や、その内包するジェンダー規範という資源を、女性たちが効果的に動員する力をつけつつあること、二、彼女たちが行為者としてイスラーム言説に積極的に関わっていることの二点を示している。ただし、イスラーム言説を使いこなす程度には、彼女たちの法識字によって明らかな差異が見られた。

一九六一年にスンナ派最高学府、アズハル大学が女性の入学を認めて以降、女性たちにもイスラームの知の体系に参入する道が開かれた。現在はイスラーム言説のアクセスに（少なくとも構造上）ジェンダー差がない点は重要である。現在はその解釈が正統性を持つかどうかが、言説空間で争われている。説教師たちがそのジェンダーゆえに排除されるという危険性を自覚しつつ、積極的にイスラームの知の体系に参入しようとするのは、正統な手続きを経ることにより、自己の言説に権威を持たせるためである。権威獲得のためには、正規のイスラーム教育およびそれによるイスラームにかかる法識字の獲得が必須なのである。そこにこそ、敬虔であることと女性であることをともに肯定する、彼女たちの試みとその豊かな可能性が孕まれている。参考　嶺崎寛子「イスラーム言説にみるジェンダー戦略と権威」（『ジェンダー研究』一二号、二〇〇九年）、七七―九一頁。

アジアにおけるキリスト教と脱植民地主義の課題

香山洋人

韓国の民衆神学は西欧的キリスト教の枠組みに依拠せず、朝鮮の民衆的伝統、物語、事件に注目しそれを典拠とした新しいアジアのキリスト教理解である。安炳茂は民主化運動への参加、民衆との連帯、事件への参与を通して現場から神学を再構築した。イエス事件の「福音」の伝承母体は民衆であるとし、「うわさ・流言蜚語」が福音伝承のメディアであったと論じた彼の神学は、そうした「民衆への回心」の結実であった。しかし、欧米神学中心の「普遍主義」を告発しつつも、第一世代民衆神学は自らの中にある男性中心の「普遍主義」、民衆事件や物語の中にある男性中心主義的な権力作用を相対化することはできなかった。

第一世代の民衆神学は、一九七〇年の「全泰壱焼身事件」を取り上げつつ、過酷な労働現場における女子労働者の問題には着目しなかった。しかし、ハーゲン・クーによれば、韓国の労働運動の始まりは実に七〇年代の女性労働者の覚醒にある。第一世代の民衆神学は一九七六年の「東一紡績」事件で露呈される労働組合における家父長的暴力に言及せず、民族主義的な正統性を持つ事件（「東学農民革命」、「三一独立運動」、「四・一九学生革命」）や、「英雄」による義挙（全泰壱事件の他、民主

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

化を求める男子学生の自殺など）を典拠とした。こうして解放的であるはずの民衆事件、民衆物語はいつしか男性化される。

こうした「物語の男性化」現象は、在日朝鮮人女性たちの渡航歴に対して「強制連行」言説が抑圧的な影響を及ぼす例にも見ることができる。こうして在日朝鮮人女性たちの民族差別と性差別という二重の抑圧の歴史が隠蔽されるとソニア・リャンは指摘する。これは鄭暎恵が描いたように、被差別者の中にも存在する男女間の権力関係を描くことが「反動的」と評される現実と同じだ。権力への抵抗言説であるはずのアイデンティティの政治が、もう一つの権力作用を生み出し、女性を排除してしまうのだ。

第一世代の民衆神学が植民地主義的権力構造や普遍主義を告発しつつもジェンダーバイアスを克服できなかったように、すべての伝承や記憶、それらに対するものがたりや証言にも同様の限界がある。必要なのは「普遍的」で「客観的」で「純粋」な語りという幻からの解放だ。「アジアの女性神学」（チョン・ヒョンギョン）が提唱したように、重要なのは教義的な「純粋性」ではなく実践であり、「生き残りと解放のための混淆主義」だ。

日本国籍、男性、大人、異性愛者、正規雇用労働者という同質性を基準としたマジョリティー的環境において、マジョリティー的男性の語りは「普遍的」な語りとして聞かれるが「男性の声」と認識される場面は多くない。民衆神学は「民衆」を中心としたアングルを提案し、フェミニスト神学は父権制的価値観に潤色されたキリスト教の脱構築を提案したが、これらは自らの「立ち位置」を明示した上で神学を語りなおす作業だといえる。「ジェンダー宗教学」という提案は、語られる宗教と語り手との間の権力関係を暴露し、同時にそれらの克服を目指している。もちろんジェンダーだけにアイデンティティを単純化することは別の本質主義を招来する危険性があるが、だからといって、自らの属性を透明化した「わたし」によるアトム的語りを推奨はしない。なぜなら「立ち位置の明示」は、他者との連帯のための必要不可欠な行為であり、沈黙というマジョリティー的権力の行使や、謙遜を装う自らの当事者性の隠蔽と責任放棄を拒否するための重要な構えだからだ。

「ジェンダー宗教学」の探求は、差異や多様性を「裁き」（創世記十一章）ではなく「祝福」（使徒言行録二章）と受け止める伝統に立脚する。状況的で多様であることは自由で開かれていることの証だからだ。

はざまの位置で
――アジア系アメリカ人フェミニスト神学の試み――

黒木雅子

ジェンダー宗教学の目標は、白人エリート男性を前提とする枠組みに女性や他のマイノリティを追加するだけではなく、排除されたり周辺に置かれている人たちの宗教実践や主体の分析に、アカウンタブルな枠組みを探ることである。言うまでもな

NII-Electronic Library Service